

常盤孤も抱くの因に題す

梁川星巖

雪は笠檐に灑ぎて風袂を捲く

呱呱乳を覓るは若為情

他年鉄柵峰頭の峻

三軍を叱咤するは是此の声

【作者】梁川星巖（一七八九〜一八五八年）江戸後期の漢詩人。作者名は孟緯、美濃の富豪な農家に生まれる、諸国を吟遊すること二十年、江戸神田に吟社を開いて教え門下生千数百人あまり、京都に移り勤皇の志士と交わり国事を議す、安政五年七十才にて没す。

【語釈】*笠檐…笠のひさし。 *呱呱…乳飲み子の泣く声。 *三軍…大軍のこと。（一軍一三五〇〇人）

【通釈】雪は笠のひさしに降りそそぎ寒風は袂をひるがえす。泣いて乳を求めているがそれを聞く常磐はどんな気持であろうだが心配するには及ばない後に鉄柵山の険しい頂きで三軍を叱咤したのはほかならぬこの声であった。

【参考】田氏女玉葆（でんしのむすめ ぎよくほう）の「平治の乱後、常盤が三見（今若、乙若、牛若）をともない大和龍門の地をさしてのがれゆく雪中難儀のさまを描いた図」に題した詩。義朝の遺児頼朝（今若）範頼（乙若）義経（牛若）の三人。ことを思い出した。